シンポジウム５

“Antimicrobial Stewardship”　それぞれの工夫と障壁
司会のことば

[1]東北大学大学院 医学系研究科 感染制御・検査診断学、[2]虎の門病院　薬剤部

賀来 満夫[1]、林 昌洋[2]

近年、ＭＲＳＡや多剤耐性緑膿菌・多剤耐性アシネトバクターなどの薬剤耐性菌による院内感染事例の報告が相次いでおり、患者の高齢化や易感染性宿主の増加など、宿主要因のリスクが高まるなか、医療関連施設における感染症診療・感染症対策の“トップリスクマネジメント”としての位置づけが以前にも増して高くなってきている。　総合的な感染症診療・感染症対策、いわゆる“感染症マネジメント”の基本は、感染症疾患の早期診断、的確な治療、伝播予防など、多岐にわたっており、中でも、適切な抗菌薬の選択と投与により、効果的かつ安全に感染症を治療し、しかも薬剤耐性菌出現抑制をはかる“抗菌薬適正使用”の臨床現場での実践が強く望まれている。このような背景のなか、欧米各国では感染症専門医、専門薬剤師、感染管理担当者などがチームとして連携協力し、「効果を最大限に」・「副作用を最小限に」・「耐性菌を惹起しない」という総合的な観点での抗菌薬適正使用、組織的な管理を行う　「Antimicrobial Stewardship」　といったコンセプトによる診療支援が実践され、大きな成果を上げつつある。　本シンポジウムでは、感染症診療、抗菌化学療法の専門家である４名の先生方にシンポジストとして御参加いただき、「Antimicrobial Stewardship」に関する現状、工夫、課題などについて発表していただく。最初に、小野寺 直人　先生（岩手医科大学附属病院 感染症対策室）には専従の感染管理薬剤師として、岩手医科大学附属病院における抗菌薬適正使用支援の実際について、抗菌薬サーベイランスやＴＤＭ活用を含めてのお話をいただく。次に、堀　賢先生（順天堂大学 感染制御科学）には、順天堂大学病院における双方向性の共通命題というアプローチを実現させるためのマニュアル作成、コンサルテーションシステムなどについてのお話をいただく。続いて、田中 昌代先生（ＮＴＴ東日本関東病院 薬剤部）には、関東病院における抗菌薬適正使用のこれまでのあゆみ、工夫、障壁などについて、ＩＣＴ活動の紹介も併せお話いただき、最後に、具　芳明先生（東北大学感染症診療地域連携講座）に、微生物検査に加え、積極的なコンサルテーション実践の重要性、医師教育の問題を含めた総合的なシステム作りについてお話いただくこととしている。　今回のシンポジウムを通じ、「Antimicrobial Stewardship」に関して“現状はどのようにおこなわれているのか、工夫は、障壁は、そして今後に向けた課題は何か”、等について討論し、抗菌薬適正使用を実践していくうえでの有用な情報の共有化をはかりたいと考えている。多くの方々の御参加、そして活発な討論を期待したい。